ヒバチ、と。今でもそんな風に陽真里(ひまり)のことを小学生時代のアダ名で呼び続けるのはどうしてだろうか？

きっと、それは他愛もない理由なのだろう。

「なんつーか、今更アイツを本名で呼ぶってのが恥ずかしいんだよな」

逃した彼女の背を見つめながら、そんなことを呟いてしまう。

夕星はコンタクトを外しながら背後へと振り返り、魔女と対峙した。

「ここから先は通さねぇぞ、竜胆麗華(りんどうれいか)」

「問題ない。貴様も私のターゲットだからな、〈エクステンド〉のエゴシエーター」

急く気持ちを抑えながらに二人は、頭の中で一つずつ状況を整理していく。

両者は互いにフェイズⅢへと覚醒したエゴシエーター同士だが、麗華は「魔女」で、夕星は「巨大ロボットのパイロット」。そして肝心要の〈エクステンド〉は修理の真っ最中で使えない。

これはどう考えたって夕星の不利になる条件だ。

しかも麗華は元ＡＲＡｓ(エリアズ)の腕利き。喧嘩歴の長さや精神論で補うのも現実的ではないだろう。

「こっちの攻撃が効かねぇ武道怪獣の時もそうだったけどさ、最近こんなのばっかで嫌になるぜ……」

では、どうやって不利な条件を補うのか。

夕星は拳を握り、スタートする。

「ッッ！」

「■■……■■、」

麗華も右手で杖を構え、詠唱を始めた。現実固定値(メルマー)が揺らいで虚空には複雑怪奇な魔法陣が展開される。

だが、

「遅ぇんだよッ！」

この距離であれば魔法の発動よりも速く、素手の方が麗華へと到達する。

荒れていた頃の夕星でも遠慮してやらないであろう喉への一撃だ。麗華は咄嗟にフリーの左手でガードするも、それでも発動待機中だった魔法は中断された。

魔法陣には亀裂が走り、バラバラに崩れてゆく。
「チッ……こちらの詠唱の邪魔をするつもりか」
息を吐かせぬ間も与えない。彼女が口を開くより速く、握った拳を前へと突き出した。
「あぁ、それしか俺に勝ち筋はねぇからなッ！」
魔女の操る魔法には一つ、決定的な弱点があった。詠唱から魔法発動までに生じる攻撃間隔のラグだ。
あの皓(しろ)く煌めく熱線(レーザー)が確かな脅威であることには違えない。だが、アレを放つまでにはザッと数えて十秒弱の間隔が開いてしまう。
「だから、唱えさせねぇって言ってんだろ！！」
「■■……■■■、」
弾いた裏拳は彼女の鼻先を掠りながらも、また詠唱をキャンセルした。
夕星が「物質Ａを一度砂塵へと分解し、物質Ｂに再構築することで願いを叶えるエゴシエーター」であるのなら、麗華は「自身の存在を異なる存在Ａに創り替えるという過程を経て、願いを叶えるエゴシエーター」だ。
そして彼女は「Ａ」の部分を「魔女」で埋めることにした。だから大抵の願いを魔法で叶えてしまえるのだろう。
敵を打倒したければ魔法のレーザーで。正体を隠したければ魔法の変身で。
しかし、彼女が魔女であることを願っている以上は「魔法詠唱にかかる時間を短くする」という「願い」は叶えられない。それは「自身を異なる存在Ａに創り替えるという過程を経て叶えられる願い」の範疇を超えているからだ。
言うなれば、彼女の現実改変能力に付きまとう欠陥である。
「ＡＲＡｓに入ってから、アンタのこともずっと考えてたよッ！　いつかは、また対立する相手なんだ。だったら俺がどう対処するかをなッ！」
「いちいち調子に乗ってくれるな」
不意に夕星の左脇腹で何かが爆ぜた。
呪文を唱える隙は与えなかった筈だ。であれば、爆ぜたのは苛烈な痛み。視界の端から迫った杖によるダイレクトな刺突である。
「うぐッ……！」
「生憎と私も素手の格闘は好きなんだ。それに魔女という存在に自分を創り替えてからは、体力にも自信がついてきてな」
現エリアズの新人工作員ＶＳ元エリアズの腕利き工作員。その練度差は、不良相手の喧嘩に明け暮れた程度で埋まるものじゃない。
麗華の動きは軍隊式のサルトや総合格闘技に近いものがあった。夕星が攻撃のために手脚を出そうとしても、先んじてそこを突かれる。
魔法の杖を刺股のように持ち替えた彼女は速やかに、戦況を制圧してみせる。

「〈エクステンド〉のエゴシエーター。貴様は案外素直な性格をしているだろう？」
「あん？」
「動きが読み易い。殺気がダダ漏れだ」
「ハッ……それをお前が言うのかよッ！」
皮肉っぽく笑ってみせるが殺気がダダ漏れなのはお互い様であった。
詠唱時間を与えるリスク込みで、夕星は杖の間合いの外へと飛び出す。
考えるのだ――――どうすればこの局面を凌げるかを。
幸いにも一つ苦肉の策はあるが、それに勝負を賭けるにも時間を稼ぐ必要がある。であれば、やはり手痛い反撃を覚悟で彼女の詠唱を潰し続ける他に策はない。
「やっぱ、これしかねぇか！」
夕星は再び杖の間合いへと飛び込んだ。リーチ差こそあれど、彼女の杖自体に殺傷能力があるわけじゃない。それに金属バットや鉄パイプといった獲物持ち相手の喧嘩ならこっちも中学時代で慣れているのだ。
杖が迫ってきた瞬間に、それを掴みさえできれば
「◎◎」
不意に開かれた口元があまりに短い詠唱を〝完了〟させる。
「なっ……！」
展開された魔法陣から伸ばされたのは光の鎖だ。皓く煌いたそれは、瞬く間に夕星の両手足を虚空へと縛り付ける。
「やはり貴様は素直じゃないか」
彼女は一言も「短い詠唱で使える魔法がない」とは言っていない。
「がぁっ!?」
鎖は夕星の両手足を締め付けていく。筋骨を圧迫し、そこに生じるのは激痛だけだ。
「これ以上、誰かの世界が壊れないように――――エゴシエーターは速やかに処分しなくてはならない。それが貴様のような勇猛果敢な少年でもだ」
「いきなり何だよ……だいたい、お前だってエゴシエーターの癖にッ！」
「あぁ、分かっているさ。だから私も近いうちに自害する。全てのエゴシエーターを見つけ出し、殺し尽くした後でな」
麗華が向ける眼差しには、殺気の中に僅かな夕星への憐憫が混ざっていた。彼女はかつて未那月と共に世界を元に戻そうと奮闘したのだ。その本質は悪虐とは程遠く、寧ろ夕星が抱いた「使命感」や「責任感」と近いのだろう。
だが、自らの命さえ処分対象だと言い捨てる彼女は既に狂っていた。グルグルと旋回し続ける歯車状の瞳がその狂気を物語る。
「……イカれてるぞ、お前」
「自覚ならあるさ。次の処分対象はフェイズⅡの疑いがある藤森（ふじもり）陽真里。次いでブログ上に

書き込んだ幼少期の記録から「スターレター・プロジェクト」の参加者であると判明した日比谷恭介（ひびやきょうすけ）と、その妹、さらにその次は――――」

彼女はブツブツと呟きながら、杖の先を夕星に押し付けた。「◇◆」と短な詠唱を済ませれば、その先が鋭利な刃へと早変わりする。

「恨み言があれば聞くぞ、〈エクステンド〉のエゴシエーター。それが唯一私にできる貴様らへの弔いだからな」

「じゃあ……恨み言じゃねぇけどさ、」

スッと軽く呼吸を整えて、夕星の口の端が吊り上がった。

「アンタこそ素直だよな。――――〈エクステンド〉がここに無いから、俺がエゴシエーター能力を使えないって油断してんじゃねぇッッ！」

夕星の考えていた苦肉の策。それらが今、廃ビルのボロ壁を突き破るようにして飛び込んできた。

円柱状のシルエットをしたそれらは紛れもなく、ミサイルの群れであった。

◇◇◇

夕星の現実改変能力は〈エクステンド〉を起点にして、その半径一〇メートル以内の物質を創り替える。ただし、能力発動に際し夕星が〈エクステンド〉へ搭乗しなければならないという誓約は存在しない。

ただ願うだけで、願いを叶える。――――それこそがエゴシエーターなのだから。

「なるほど……こういうケースの場合、こんな風に叶うんだな」

能力発動の起点が〈エクステンド〉である以上、極論を言ってしまえば夕星が地球の裏側で願いを念じただけでも、機体の周囲ではそれを叶えようと現実改変が起こってしまう。

夕星のエゴシエーター能力だからこそ出来る、一つの裏ワザだ。

廃ビルの中で麗華と対峙した瞬間に「この不利な状況を覆したい」と夕星は願った。その結果、飛び込んできたのがこのミサイル達なのだろう。

今頃エリアズの基地内では、ミサイルを構築するために様々な物質が砂に変換された筈だ。それは高価な機材であったり、誰かの私物であったかもしれない。夕星は内心で「皆さん、すみません！」と謝りながら、前を見遣った。

外壁を突き破り、床へと突き刺さったミサイル達は白煙を吐き出して視界を一色に塗りつぶしていく。これは幼少期の夕星が〈エクステンド〉に、「正義の味方」であって欲しいと願った誓約。だからミサイル自体に殺傷能力は付与されず、実態はスモーク弾に近いものになっていた。

だが、絶対絶命のピンチを覆すのにこれ程までピッタリなものもない。

麗華にしてみればいきなり想定外が起こったのだ。そこで彼女の集中が削がれれば、彼女

の発動していた魔法もまた不安定なものとなる。
「さぁ、反撃開始だッッ！！」
両手脚を引けば、鎖は簡単に千切れ、背後の魔法陣は完膚なきまでに崩れ去る。
自由を手にした夕星はそのまま息を殺し、粉塵と白煙の中に身を投じた。これで麗華の視界から完全に消えられた筈。
（殺しはしねぇ……だけどな、十悟のときの借りと陽真里を傷つけようとした分くらいは返して貰わなくちゃ、割に合わねぇんだ）

そして、彼女の三角帽子とローブ姿というシルエットは烟（けむ）る視界の中でもよく目立つ。
足元に転がる瓦礫の一つを拾い上げ、夕星は彼女に迫った。一撃で彼女を昏倒させようと振るった腕、確かな直撃コースをなぞっていただろう。
だと言うのに、夕星の一撃は空を切る。
「は…………？」
麗華の立ち位置を見誤ったわけでも、途中で何かに躓いたわけでもないと言うのに。
「なぁ、〈エクステンド〉のエゴシエーター。ＡＲＡｓの秘密基地には、今でもとあるエゴシエーターを能力を元に開発された転送装置があったんじゃないか？」
魔女の身体が光の粒子となって溶けたのだ。次第に白煙が晴れて、視界がクリアーになっていく最中。粒子は再び「竜胆麗華」と言う個人を再構築していく。
「私のエゴシエーター能力は一度、自分の身体を光の粒子に分解することで再構築を行うんだが、その際に再構築する座標は私が自由にズラすことが出来るんだよ」
ＡＲＡｓの転送装置は麗華が工作員だった頃、そのエゴシエーター能力の〝副次的な作用〟に未那月が着想を経て開発が進められたものだ。
そして麗華が再構築に選んだ座標は、夕星の真後ろ。――――鋭利な刃と化した魔女の杖先が、再び首元へと押し付けられる。
刺すような痛みのあとで、ぬるりと流れたのは自らの鮮血か。冷汗が数滴、額から足元へと滑り落ちた。
「貴様は考えたことがなかったか？　スターレター・プロジェクトの参加者が次々とエゴシエーターに覚醒していくのなら、この世界はもっとおかしなことになるんじゃないか？と」
「……俺はバカだから、もっと分かりやすく言いたいことを言ってくれねぇかな？」
「そう結論を急ぐな。この世界の日常は確かに歪だ。月に一度、エゴシエーターの生み出した巨大ロボットと怪獣が戦う。だが、この世界の歪みがその程度で完結しているのは、私がエゴシエーターを見つけ次第、殺し尽くしているからだ」
麗華がエリアズは離反したのは三年前だ。そして、この瞬間に至るまで彼女はエゴシエーター狩りに明け暮れていた。座標さえ判明すれば世界中のどこにでも現れることのできる彼女のワープ能力は、さぞ役に立ってことであろう。

魔女が黒衣を纏うという共通認識が定着した背景には、「聖なるものと対をなすイメージを押し付けられたから」や「人が本能的に恐怖を抱く闇から連想された」等、様々な説がある。

だが、麗華が烏羽のような黒衣を纏う理由はシンプルに、浴びた返り血を覆い隠す為であった。

「私は沢山のエゴシエーターを見てきた。〈エクステンド〉のエゴシエーター、貴様の現実改変能力はその中でも中の下と言ったところだ。殴り合いのセンスだって月並みの筈。なのに、ここまで私に歯向かってみせたのはお前が初めてだ」

「ビビったら負けだと思ってんだよ、悪いか？」

まだ皮肉を吐く余裕があるのかと、麗華は少し驚嘆する。

これは彼女の経験則からなる直観なのだが、この手のタイプは一番気危険だ。恐怖を感じない、或いは恐怖で押し殺さないからこそ、何をしでかすか分かったものじゃない

「〈エクステンド〉のエゴシエーター。貴様は必ず世界の敵になる。だから私が今ここで確実に貴様を処分する」

始まる詠唱は死へのカウントダウンだ。

「■■……■■■……」

夕星は身を翻し、反撃を試みた。

だが、首に当てられた刃先がそれを許さない。さっきのようにエゴシエーター能力を発動させようと、〈エクステンド〉の発生させた事象が、この場に影響を及ぼすまではタイムラグがある。

「■■……■■■……■■■ッッ！！」

放たれた閃光が髪の端を焼いて、夕星の脳天貫く寸前――――誰かがそこに割り込んだ。

「なっ!?」

夕星は咄嗟にその誰かを受け止めながら、二人でゴロゴロとビルの端まで転がった。

ちょうどその部分の床が脆くなっていたのもあって、二人は下階まで落下していく最中。

ふわりと鼻先を掠めたのは、咽せ返るような鉄臭さと、甘い幼馴染の香りだった。